

水島 司・川島博之編

『環境と開発』

(激動のインド 2)

日本経済評論社 二〇一四・三刊
A5 三二二頁 四〇〇〇円

本書は、シリーズ『激動のインド』(全五巻)の一冊である。同シリーズは、激動する現代インドをめぐる諸状況を把握・展望するための学際的な取り組みである。そのうち本書は「環境と開発」というテーマについて、その歴史的淵源と現在における問題の双方を検討するものである。

本書の構成は、第1章「人口と土地開発の長期変動」(高橋昭子・水島司)、第2章「センサス期(一八八二〜二〇一二年)の人口変動」(宇佐美好文)、第3章「降水動向と農業・都市」(岡本勝男・堀野豊人)、第4章「インドの農村と食料生産」(川島博之)、第5章「食料生産に伴う窒素循環と環境汚染」(新藤純子)、第6章「県別窒素負荷量の推計からみるインドの環境問題」(関戸一平)、終章「二一世紀におけるインドの環境問題の行方」(川島博之)となっている。

前半部(第1〜3章)では環境・開発の過去二〇〇年間に及ぶ歴史的経緯を検討する。まずタミルにおける一八世紀末〜一八七〇年代までの人口・土地問題について、耕地の外延的拡大と人口増加の密接な関連性を特徴とみなす。続いて一八七〇〜二〇一一年における人口問題を扱い、その地方偏差の重要性に言及する。ま

た現代では、米・小麦生産地双方において、灌漑設備の充実によって安定的農業生産が可能になったとし、例えばマドラス市の貯水量を試算しているのである。

後半部(第4〜6章及び終章)においては、現代インドの環境・開発の問題を扱う。そのなかで、東・東南アジアやアフリカの土地・食料の諸データとの比較検討、インドが緑の革命を経て食料問題を脱し一九九〇年代以降穀物の純輸出国に転じていること、さりながら単収増加をもくろみ、窒素肥料を使用することが引き起こす環境汚染には今後警戒すべきであること、また都市化においても窒素汚染を避けるべく下水整備を進めることが提言される。

本書の特徴は、第一にディシプリンを異にする多数の研究者による最先端の研究が収められていることである。各専門家が、インドの環境開発について、例えば人口増加・土地利用・水利用といった共通トピックを念頭に、専門事項を論じている点で、特に価値が高い。

第二に、その専門によらず、依拠する史資料として、センサス、全国標本調査、あるいはFAO統計といった、数多くの大規模な広域的・定期的数量統計の利用によって、比較的一貫した見通しが得られていることである。

第三に、タミルナードウ州に関する考察を起点としていることである。タミルにおいては村落地片レベルの数量統計の検討や、地理情報システムを用いた研究が進んでいる。従って、特に本書前半部で、まず近代タミルの環境を論じた上で、亜大陸内の地域偏差に言及を進めているのは、如何にインドを語りうるかという

方法論として興味深い。

本書を通読することで、インドの環境・開発といった現代的課題に長期的視野からアプローチした現状分析と解決方法についての見通しとが得られる。高度に細分化されるインド地域研究について、各専門の方法論の先端を示すと同時に総合的に俯瞰するという難事に挑んだ書物であり、その刊行を嘉したい。

(原 孝一郎)